

演題名：COVID-19 レジストリの立ち上げ・運用・利活用の経験

演者：大曲 貴夫

国立国際医療研究センター国際感染症センター長・感染症内科医長

抄録：

国立国際医療研究センターは、全国の COVID-19 と診断された患者の特徴や経過、薬剤投与後の経過など明らかにすることを目的としたレジストリを厚生労働科学研究の一環として開始した。2022 年 4 月 4 日時点の段階で研究参加施設数は 708 施設、レジストリ登録症例数は 63,426 症例である。本研究は本邦の COVID-19 の疫学・臨床像・治療内容・予後等について多くの情報を提供した。結果は厚生労働省の新型コロナウイルス感染症アドバイザリーボード、予防接種・ワクチン分科会 予防接種基本方針部会等で提示された。

課題はレジストリの入力に要する人手の問題である。日本の医療機関では電子カルテから情報を抽出して研究に活かす仕組みは発達していない。よってレジストリへの入力は別途人手を使って行う必要があり、1 例あたり少なくとも 1-2 時間かかる。しかし COVID-19 の診療にあたる医療機関は一般市中病院が多く、研究支援体制は脆弱であり、この入力補助者の確保もままならない。

新興感染症対応には情報は不可欠である。情報は臨床の現場から得られる。しかし臨床の現場の研究支援体制は脆弱である。ここを理解頂きたい。筆者はまず新興再興感染症を診療する感染症指定医療機関の研究体制の充実を訴えたい。